

「私の大きな支えとなった先輩の一言」

新潟県上越市立頸城中学校

三年 小川 さくら

私は、小学校一年生のときから書道を習っています。はじめの頃は字を書くことが楽しく、どんどん上達していきました。私に通っている書道教室には幅広い年代の方がいます。小さい保育園児やお年寄りまで、一生懸命に字を書いています。私はいつも字を上手に書いている人を手本に書道に取り組んでいます。その中の一人に私が小学校の頃から今でも手本にしている先輩がいます。私は毎週その先輩の書く字を手本にしていつか先輩のような字を書きたという大きな目標を持っていました。

書道を続けて四年目の夏、私の作品が全国で使われている書道本の「今月の最優秀作品」に選ばれました。優秀作品に選ばれることはそれまでに何回かあったのですが、最優秀作品に選ばれることは初めてで、親や祖父母、書道教室の先生など多くの人にほめられました。そのときは私の字が一步先輩の字に近づいたと感じることができました。

また、その年の冬、毎年行われている書道の大会で学会奨励賞をいただきました。そのときもまた私の字がもう一步先輩の字に近づいたと感じることができました。

さらにその年の書き初めて三席をいただきました。

そのときもさらに私の字がもう一步先輩の字に近づいたと感じることができました。

しかし、絶好調だった年から四年の間、私は特別な賞ももらえず気持ちも落ち込み不調な日々が続きました。一つ一つの大会で賞が取れなかったりすると悔しく涙を流すこともありました。また、書道をやめようかなと思う日もよくありました。そんなときに私を元気づけてくれた言葉が先輩の、「いつも部活終わりで疲れているのに休まずに通っていてえらいね。応援しているよ。」の一言でした。

中学校二年生の二学期、私は放課後に生徒会役員選挙のための垂れ幕を書いているときに、先輩の弟がこの一言を教えてくださいました。

「お姉ちゃんが家でこう言っていたよ。いつも部活終わりで疲れているのに休まずに通っていてえらいね。応援しているよ。」

私はこの言葉を先輩の弟から聞いたこともとてもうれしくて自然に顔から笑みがこぼれました。それと同時に、今落ち込んでいる場合ではない、せっかく先輩が私にアドバイスをくれたんだから頑張らないうと、という気持ちがかみ上げてきました。私は、先輩から直接その一言を言ってもらったわけではありませんが、ずっと手本にしていた人からアドバイスをもらったというだけですごくうれしかったし、自分の励みにもなりました。この一言は私の心を動かし、本当に私に「ちから」をくれました。

私は小学校一年生のときに書道を始めてから今年で九年がたちます。時には書道をやめようと考えてる日もありましたが今まで続けていて後悔したことは一度もありません。むしろ、書道が続いていることによって達成感や感動を味わったことは数えきれないほどあります。また、書道をしていることでくや

し涙を流すこともたくさんありました。うれし涙を流すこともめいっぱいありました。私が味わった達成感や感動の裏側にはいつも先輩の一言があります。私がこれまで努力して書道を続けてこられたのは自分の力もありますが先輩の一言のおかげでもあります。今、考えてみると自分自身が四年間うまくいかず悩んでいた時間は、私がどんな困難も乗り越えられるようにするための成長の期間だったのでないかと思えました。その成長の期間に私がくじけないように支えてくれたのが先輩の一言です。それほどこの一言は私の心に響き、私に「ちから」をくれたものだったので。

そして四年ぶりに努力の成果が実る日がきました。中学校二年生の冬休み中に書いた書き初めが会長賞に選ばれました。この作品を書いたのは先輩の一言を聞いてから一カ月もたっていないときでした。そのときは久しぶりすぎてうれしくてたまりませんでした。私の字がもう一步先輩の字に近づきました。

私は、これからも努力を惜しまず書道を続けていきたいです。そしていつか私の書く字が先輩の字を超えられるように頑張ります。